

子ども一人ひとりの発達支援

所長 中村 雅子

新しい年度が始まりました。

学校では、社会に開かれた教育課程を目指し、課題を学校の中だけに止めずに、社会と共有しながら、共に子供の成長・発達を支えていこうとしています。これまで以上に、学校と社会とのつながりが大切になっていくことでしょう。そして、放課後等デイサービスをはじめ関係機関による支援が、すべての子供たちに行き届くことを願っています。

本研究所には、放課後デイサービス指導員、特別支援教育の専門家、医師（学校医、研究者）、臨床心理士、公認心理師、主任児童委員などのメンバーがいます。本年度も、学校と放課後等デイサービスとの連携のもと、子どもたちの発達を少しでも支援していくことができれば嬉しく思います。

さて、今回は、子どもの「苦手なこと」について考えてみましょう。「子どもは大人のミニチュアではない」と言われるように、子どもには、大人とは異なる感じ方や反応があります。子どもの頃の感じ方を思い出してみましょう。それが、目の前の子どもを受け止め、支援を考える上できっと役立つでしょう。

60年も前の私の思い出は、小学校に入学前の健康診断の怖いと感じた思い出です。ずっと昔の小学校ですから、会場となったのは、木造の黒光りのする広い講堂でした。6歳の私には、とても暗くて広大なところに思えました。それぞれの診断個所を何とか我慢して回りましたが、最後の視力検査では、もう涙で文字が見えず、視力に問題があるのか、それとも理解できていないのかと診断する人を悩ませてしまったことを覚えています。

そういえば、周囲の友達にも、それぞれ異なる点で苦手なことがあったことを思い出します。ある友達は、国語の教科書を読むとき、すぐ横の行に読み進めることができず、何行か飛ばしてしまうため、意味が分からず困っていました。また別の友達は、小さい「つ」や「よ」など、特殊音節がどうしても区別できず困っていました。他にも、漢字が覚えられず困っている子、板書をノートに書くのが苦手な子など、人によって異なるつまずきがあったことを思い出します。

今はどうでしょう。学校や放課後等デイサービスでは、子どもたちが発達の途上で抱えがちなつまずきを、減らしたり無くしたりする工夫がなされるようになりました。さまざまな手立てが社会で共有されるようになってきました。例えば、学校では、だれも見やすい構成的な板書を書く、読むべき行を見やすくするためスリットを使う、漢字を部位に分けてイラスト化して覚えるなど、さまざまな手立てが開発され共有されています。また、生活面でも、一日の流れや一時間の進め方を、だれも見えて分かるように書き示し、今どこまで進んだのかわかるようにしておくこと（時間的構造化）や、活動を行う場所を決め、だれもがそこで何を行えばよいかを分かるようにすること（場の構造化）など、さまざまな工夫がなされるようになりました。

同じように、家庭でも、こうした工夫をすることで、子どもたちが過ごしやすくなります。いつも決まった場所に物を置く、置き場所を示す、持ち物を多くしない（当面使わない物を見えないところにしまう）、言葉だけに頼らず、絵やマークで示す、朝起きてから登校までの予定に合わせて、持ち物を置く、「ちよっと待って」ではなく「5分待って」のように、分かりやすく伝える・・・など、いろいろな手立てを家庭でも取り入れ、親子で楽に過ごせる工夫ができるとうれいですね。